

11  
468

華道眞養  
未生御流  
體用相應之卷  
完

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始





11-468

華道眞養

中傳體用相應之卷完

未生御流

夫れ中傳の華形は、性情の兩氣を體用と挿す。性と  
 情とは即ち體用なり。假令へば、眞行草の文字を書  
 く如し。偏は陰なり。旁は陽なり。偏と旁との間に和  
 合の縁を結びて種々の形をなす。插花の働き此  
 に同じ。體は性なり。用は情なり。性情和合の縁を結  
 び虚實等分に備へ、姿の變化自由なるべし。

一本の枝を揉め、華瓶へ移し挿したる是れ體なり。  
 此枝に准じて形宜く小枝を添る。是れ用なり。前  
 一本の枝と悉く縁を結び挿したるが體用相應の

正  
大  
10.7.  
由

大  
理  
結  
内



姿なり。又人道にとりては體は一家の主人の如く  
用は眷屬げんぞくの如し。主人眷屬同志にして其家治る。是  
れ即ち體用相應なり。

萬よろずの草木は非情無心なりと雖ども、天地寒暖  
の恵めぐみみを享けて、時をたがへず花咲き實る徳あれ  
ば、是れを愛して、陰陽和合虚實等分體用相應の道  
理を辨わきまふ可きなり。

### 目録

皮 肉 骨 の 事	一
木 物 揉 様 の 事	一
眞行草華臺飾り付并に挿し方の事	二
徳相貧相閑靜の花心得	三
五重切花取合せ挿方の心得	四
遠 山 霞 の 花 心 得	五
沖、渚往來の船并掛舟挿方	六
和 睦 花 の 挿 方	七
香 席 の 花 挿 方	七



拜受したる花并花器の取扱方……………七

貴人より插花御所望の時心得……………八

枇杷一色挿方の事……………八

萩一色猪の座の景色挿方……………九

木賊菫込揉様の事……………九

伐り竹に筈應合ひ挿方……………〇

根遣ひ三種の心得……………二

柳五通り挿方……………三

段取物五種の挿方……………三

蘭物五種段取の挿方……………五

軸附葉物八種の挿方……………五

葉物七種組方の事……………天

長葉物七種組方……………三

梅二通挿方の事……………二

牡丹冬牡丹挿方の事……………天

山吹玉川の景色挿方……………七

藤、河骨、杜若三種取合挿方……………六

杜若一色挿方……………元

河骨一色雨中の景色挿方……………〇

蓮、河骨、杜若、蘆、水葵五種挿方……………三

一切實物の挿方……………三

左旋右旋之論……………三



虚 實 之 論 …………… 言

華術心得草木人畜出生之論 …………… 言

目錄終

皮肉骨の事

◎挿たる花に皮肉骨を取るごきは、頂上は皮なり、半間は肉なり  
 水際は骨なり。鉢の枝を渦に揉め、肉にて用の格を取り挿るこ  
 ぞ肝要なり。客位の花は陰より陽をさして出づる故に、鉢の枝  
 は陰にもごづいて右旋に揉る。主位の花は陽より陰をさして  
 出る故に、鉢の枝は陽にもごづいて左旋に揉る即ち天地の旋  
 る處にして、一瓶の花陰陽の通ひ備ふるなり。揉方口傳

木物揉様の事

◎南天、梅擬、其他揉め利かぬ物を揉る時は、紙を鹽水に潤して枝  
 を巻き、火揉めにすべし。小枝は蠟燭にて揉る口傳



眞行草華臺飾り付并に挿し方の事

◎右華臺、三面床に飾る時は、明り口の方へ行の華臺、床柱の方へ草の花臺、中央へ眞の華臺を飾るなり。是眞行草即三才の飾付なり。華は眞行草と挿すべし。眞の挿方と云ふは、體の枝に花葉を多く繁りて姿暖く籠りたる勢を備へ用留はあつさりと正直に挿す。行の挿方とは華の惣長を四分六分とじて、水際を四分上部を六部と振分けたる半に、花葉多く繁らしたるを行の挿方なり草の挿方は半分下に花葉多く根元に風流を備へ水際涼しく挿たるを云ふ。

花器は、眞は金、行は土器、草は竹器よろし。眞の花臺、眞の花の時

は冬なり。行の花臺、行の花の時候は春と秋なり。草の花臺、草の花の時候は夏なり。又花は、眞は木物、行は華車なる木物及草花草は草花水草などは至極よろし。右の如く眞行草の飾花の取合せ、四季とも是に准ずべし。

徳相貧相閑靜の花心得

◎徳相の挿方は萬ずの枝に滞りなく、勢ひ能く用に満開の花を遣ひ、體は用に准じて半開を遣ひ、留に蒼を遣ふ總體に花多く開く景色あるを徳相と云ふ。

貧相とは直ちに延びたる枝の花葉を、心得も無く透すなど、姿の調はずして淋しきを云ひ、勿論好ましからぬ事なり。



又閑靜と云ふは挿し上げたる姿しをらしく、なよくしき枝にも云ひ知れぬ味ひあり、花葉少くして、若かも情味の盡きぬ詠めある挿方にて、挿花の妙處は是れにあり。

五重切花取合せ挿方の心得

一柳

白梅

白椿

金丁花

萬年青

山黄

吹梅

桃

胡蝶花

芭岩

蘭蔀

金錢花

白藤

大

手

柿

紫華鬘

八蘭草

芭岩

蘭蔀

石金錢竹花

四季とも右取合せに准じて、色の見切り又は草木の位を勘考すべし。白紫黄紅赤と上より准に遣ふべし。何れ上筒へ垂物を挿るなり。鐵線、風車、金錢花、定家蘿、夏黄梅、白萩、蔓、或蔦、蓮、翹の葉ばかりなごをも遣ふ。又蔦の紅葉、定家の紅葉などは葉の色なれば、下に白き花を遣ふ事苦しからず。尙此二種は四季とも上筒に遣ひて宜し。

遠山霞の花心得

◎二重切或は三重切の花器にて、下筒に木物を挿れ上筒に草花を挿る時は、山上の草を麓より見上る景色なる故に遠見なれば花葉の明白に分り難き風情を挿る。菊なごを遣ふ時は大葉



を切葉にして舳用留と挿れ、其間へ蒼半開の花をちらくし、見ぬ隠れに遣ふべし。又石竹、藤、撫子、鱗麒草、布袋草、霜黄揚などは花少くして、數も分らぬやうなるものなれば至極宜し。尙ほ口傳

### 沖、渚往來の船并掛舟挿方

◎沖往來の船は床より指尺にて七ツ半或は八ツ目に釣る。鱸花帆花共に霞花の心にて、明白に見ぬやうにすべし。鱸花には天門冬の蔓、糸杉、金雀枝など宜し、帆花は霞花の類なり。渚往來の船は床より四ツ目五ツ目に釣る。鱸花帆花共に明白に見へるやう挿す故に、鱸花は猿猴杉、柳、糸櫻、帆花も花葉枝の

數のよく分るやうの草木を遣ふべし。

又懸船の綱花と云ふは船の後より手前へ出して挿るなり。

### 和睦花の挿方

◎和睦の花は櫛の木に其時候の草花を應合ひて挿るなり。最も白き花よし。櫛は陰木にして陽氣を抑へる理なり。

### 香席の花挿方

◎香席も茶席の心得にて、花を派手に挿れず、都て匂ひある花悪し。

### 拜受したる花并花器取扱ひ方

◎拜受したる花は随分大切に取扱ひ枝葉心の儘に揉る事遠慮



八  
すべし。若し過ちに折る事計り難き故なり。挿花の法に過ちなく徳想に挿ける事肝要なり。掛置共花の姿に應じ何れも床の中央へ挿る。書院に鈎香爐等、焚物ありて然るべし。又拜受の花器取扱ひも同意なり。

### 貴人より挿花御所望の時心得

◎貴人の御前へ出て挿花を御観に入れる時は、萬事失念なきやう位正しき草木を用ゆ。御差圖の別室にて挿る時は花の姿の亂れざるやう心得あり口傳。

### 枇杷一色挿方の事

◎枇杷の出生は大小々々の葉陰陽々々さ向ひ合ひて榮るもの

なり。故に挿花に愛する時も葉を透す心得あるべし。葉は行儀正しきものなれば、挿けたる花の半に横一文字さ云ひ虚實の葉一枚遣ふなり。挿方口傳

### 萩、一色猪の座の景色挿方

◎萩澤山に挿る時は大なる掛籠よろし。用に宮城を五七本、躰に五七本、留の座は切葉にして臥猪の景色を挿る。故に少々の見切は許し、葉茂く用ゆ。

### 木賊、苜込揉様の事

◎木賊を數多く挿る時は躰を虚實にして挿花の法に揉る。出生の直き處は用留にて取る。應合ひは四季ともに優しき草花を



遺ふべし。又据物に挿る時は株を分けて木賊の若芽を遣い出生をあらはす。應合ひは右同様株分に遣ふなり。揉方口傳。

### 伐り竹に筍應合ひ挿方

◎注連の傳の伐り竹は二本に三枝を備へ、節は五つなり。又三本の挿方は長き竹に四節二枝を備へ、上を大斜に切る。中の竹は三節二枝を備へ上を中斜に切る。短き竹は二節一枝を上は平に切る。此三本を姿能く挿る。五月になれば筍二本應合ひ、尤も筍に三符を分る是れ天地人の三符なり。葉の備へ方は魚尾金魚尾飛雁と備ふべし。花器は据物に三才の石を飾り、天の石より竹、人地の石より筍一本宛挿る。應合は竹の位に准じて、四季

とも花車なる木物か、若しくは草花を遣ふべし。何れの竹にても筍の有る頃は、筍を使ひて宜し。

### 根遣ひ三種の心得

◎福壽草は薄廣口に石を飾りて一色挿る事あり。又白梅の應合いにも遣ふ。何れも根を伐る事悪しく白根を見せて挿るべし。◎富貴草も根を伐ることあしく、兩種共その名の尊き故に他ならず。

◎水仙は陽氣につれて白根あがる故に、春になれば白根見せて遣ふことあり。廣口へ石を飾り砂留にして挿る。また木物の應合ひにも遣ふ、口傳。



柳五通り挿方

◎猫柳の直なるを數多く挿る時は体の後へ玉の景色を備ふ。柳挿方口傳。

◎長閑なる氣色を挿る柳は、大垂にて掛花器へ挿る。花姿は用の枝の末に強く勢を持たす事悪しく、柳の性を重んじてすらりご下りたるが宜し。常に垂柳を挿る時は、用の枝を活に揉め、添枝を死の枝に遣ひ、死活々々と遣ふなり。

◎春風に靡く景色を挿る時は、小垂にて置花器に挿る。花の姿は用の柳を吹嵐の枝と揉め、躰の枝を吹揚の枝と挿る。是躰用の挿方なり。風景の柳なれば少し見切るは宜し。揉方口傳。

◎雪の景色を挿ける時も小垂にて置花器に挿る。數多の枝に雪の積りたる景色なれば、枝の揉方口傳。又應合を添ふこと惡し◎縮柳は大垂の柳三才を一つによせて根を輪に結ぶ。是三つより一つに納め、解けば則ち三つに歸る。三則一也。一則三也。もこ拜領の柳なれば、隨分長き處を愛し根を輪に結びて挿たる所こそ縮柳なれ。輪より下り、枝の末強き勢持事あし。此柳は實にして唯長きを尊むなり。華器は二重切の懸で下筒は白玉椿を應合ひ、姿は縱鱗にて慥に插花の法を備ふ。花は三輪霜圍の葉を遣ふべし。船に挿る時は柳の根に椿を遣ふなり。

段取物五種の挿方



◎羽衣草は五段より九段迄段を取て挿る。先五段の挿方は用に二段躰に二段留に一段なり。又七段の挿方は用に三段躰に二段留に二段なり。九段となれば何れも三段宛なり。且つ躰用と挿る時は内用前留株分等姿の變化拵方口傳。

◎小菊段取挿方如前。

◎下野段取挿方如前。

◎草下野段取挿方如前。

◎女郎花段取は廣口其他据物に挿る時は株を分けて出生の葉を遣ふ此葉は大根の葉に似たり。組方口傳。

右段取挿は其葉の出生に應じてなれば是に准じたる花は段

取に挿て宜し。五七本九本位花車に挿たる時は段取の姿なり

### 蘭物五種段取の挿方

◎細蘭ほそらん五段より九段まで挿方口傳。

◎三角蘭如前。

◎琉球蘭の挿方如前。此蘭は三角にて末に三葉づゝあり。

◎婦久蘭はなこらんは四季共に有故に其時候の氣節を備へ愛すべし。

右四種の應合は杜若かきつばた、水葵すみずき、花澤瀉はなざさ、匙澤瀉さしざさなり。

◎太蘭は別して傳あり。應合は蓮はす、河骨かほねを始め水草何にても遣ひて宜し。

### 軸附葉物八種の挿方



◎紫蘭の出生葉二方へ出て其中より花を生ずるなり。華瓶に挿る時は此出生に随ひ虚實を備へ葉を組直して取扱ふ口傳。

◎巖蘭の出生も葉二方へ出て、花はその外より出するなり。花葉を遣方口傳。

◎熊鷹蘭出生一、檀特草の出生、此二種は眞に花咲故に切葉にして取扱口傳。

◎宿沙は實を愛す出生如前。

◎鬱金蕉は組葉し中に花咲くなり。

◎芭蕉は随分小きを愛すべし。あしらひは四季共見合にすべし

葉物七種組方の事

◎唐車前子の出生は、葉は十方へ出て實の出る所は其眞中にあらず。故に葉を鉢用留へ添へ、不添の葉の境葉を遣ひ、五葉か七葉か九葉迄。實を遣ふ所は鉢の葉の後に一本、用の葉の下より一本、界葉の後より一本、何れ共組葉の外より實を遣ふなり。尤も葉の長に准じて實を高く遣ふべし。

◎岩路の挿方は用に大葉を挿け。鉢に中葉を遣ふ。鉢用の添に至つて、小葉を遣ふ。此葉は力葉と稱ふ。大葉々々の間に小葉を遣ひ花は組葉の中に入る。五葉一花又は二花を遣ふこともあり又七葉二花又は三花遣ひても可なり。界葉を遣ひ株を分けて九葉三花を挿るべし。又花無き時はやさしき草花を應合ひて



愛すべし。

◎擬寶珠の出生は十方へ葉が出で、花は眞中より出る葉は鉢用留界葉添はず不添の葉を遣ひ五葉一花但しは二花、又は七葉二花、七葉三花又は九葉三花迄遣ふべし。尤も花は葉よりも高く遣ふなり。

◎紫苑の出生は拜み葉と云ふこと有り、故に插花を愛する時その景色を遣ふ先用に大葉を一枚挿け、その上に拜み葉を挿る、尤も左右同性の葉にては悪し。一葉直なれば、一葉曲なるを遣ふ。其中に花を挿る。又鉢も拜み葉有つて其中に花を挿る。留も此れに准ず。尤も五葉一花又は三花、七葉三花、九葉三花迄挿

るなり。元來花一本に葉三枚の割にて一花三葉、五葉一花、七葉にて二本を遣ふは定法なれ共、此四種は大葉にして力強き故に五葉にて二花を遣ふこと虚實なり。各組方口傳。

◎芭蘭は三葉五葉七葉より、漸々數入と云ひて、葉の丈けに隨ひ數多く挿るなり。七葉の組方は中に堺葉一枚遣ふ九葉十一葉にて堺葉二枚遣ひ三株に組み又十三葉十五葉も組み時は堺葉四葉も遣ひ五株にも組むなり。尤も添而不添の葉は數を限らず程、能く遣ふべし。是常盤草なる故にその時候の草花を應合べし。又芭蘭の出生は尖葉の三符を含み出生のあるものなり。根元は天地人と三枚の皮あつて中葉成長す。又花は土際に咲



くなり。其頃は三月より四月下旬迄なり。此時候は芭蘭の外の草花を應合ず。客席へ挿ること苦しからず。廣口へ挿る時は、大葉二株又は三株入れ、その間へ尖葉に花を添えて應合へし。尤も砂留にて三才の石を飾る大廣口なれば天一地六の割にて小石を飾る。尙又茶席の挿方は薄廣口に石を飾り尖葉こぎに花を添えて三株挿る。座敷の床にて大葉を見せ、席の床にて未生の葉花を愛して客を尊敬すべし。又二間三間の座敷なれば、次の間に成長の芭蘭を挿け、奥の床には出生の挿花を見せるべし。尖葉の三符の別け方口傳。

◎濱はま藜あざ蘆あしの出生組方花の遣ひ方萬年青同様なり。

◎萬年青の出生は始めに陰陽と組み出て出る。又中より陰陽と組み出て出る。則ち此の四葉は東西南北をさしていづる。其中より三葉を出ず是一鉢に七葉生するこそ萬年青の出生なり。八葉目出づること始に出したる葉に虫付く又は腐葉くちとなるものなり。故に挿花を愛する時は七葉を一株として組み、實は一本遣ふ。尤も十一葉迄は腐虫くち喰くを遣ひ一株に組むべし。又十五葉の組方は始七葉を組み、此横へ若葉五葉を組合す。實は二本遣ふ。實圍の葉三葉是七五三、十五葉の組方なり。九葉十三葉は是に准すべし。組方口傳

### 長葉物七種組方



◎ 蔦尾は四五枚行儀よく組みたるを始めに挿れ、其上に花を遣ふ。夫より追葉三四枚遣ひ、又花を挿れ其後へ小葉にて三四枚行儀よく組みたる葉を挿る。花は三本、但し五本遣ひてもよし葉拵方口傳。

◎ 檜扇は前に三枚組む。尤も中の葉長し、夫より花を陰陽に挿る葉二枚遣ふ。是五葉の平組なり。又花三本五本も遣ふ時は、前葉五枚うしろ二枚是七枚の平組みなり。夫より留組みと云ふ。前五枚其左右へ二枚づゝ挿れ其中へ花七本九本十一本此上數は限らず奇數に挿る。又追葉二枚。挿方口傳。

◎ 萱草の出生は花葉組みの外より出づる故に葉にて姿を調へ花は別に遣ふなり。株分けにして二株三株と挿る一株に花一本づつ遣ふ。挿方口傳。

◎ 花菖蒲の花を二輪遣ふ時は、前葉三枚中葉短く組み是を用ひ葉と挿れ、其上に用の花を挿る。夫より躰、躰添の二葉を挿る。花より短し。其後へ陰の蕾を挿る。留葉二枚挿る。是七葉二花の挿方なり。尤も五葉一花をも挿るなり。三花九葉の方挿は前五葉挿れ花を躰用と遣ひ、又葉を躰添と二枚夫より蕾を留に挿れ葉二枚挿る。是九葉三花の挿方なり。五輪十五葉又一本の花留にて二株三株の挿方口傳。

◎ 杜若花葉の遣ひ方菖蒲に同じ。尤も花より葉を長く遣ふなり



冠葉の遣方口傳。

◎蘭は唐山より渡りし時は花一輪にて有りし由なれど我朝にて變化ありて花數多く出生有り。雖も今に其香甚し。一輪にて渡りし時は、其匂ひ誠に言語に述べ難し。かや故に挿花に愛する時も此根本を失ずして、取扱ふこと肝要なり。光づ五葉一花の挿方は用に皮肉骨の備りたるを挿れ、添に直なる葉を挿れ、此二葉にて鳳眼を取る。鉢に勢強き葉を挿れ、添にひらりと後へ返りたる葉を遣ひ、留に直なる葉を挿れ、鉢添の葉と鳳眼を取る。花を手前より挿けて鉢用の葉の中へ出づ、猶七葉二篠九葉二篠十一葉三篠花は三本夫より株分け挿方等口傳

花器は金土器宜し。竹花器はうつらぬものなり。

梅二通挿方の事

◎南性北性の梅と名付けし故、花を客位に挿したる時を南性の梅と稱し、主位に挿たるを北性の梅と稱す。客位は陰より陽をさして出る。是陽中陰の花なり。主位は陽より陰をさして出る。是陰中陽の華なり。梅の姿は一本の枝の鉢用と備りたるが宜し。養の傳有りて鉢の枝花は半開用の花は満開の一本の枝にて花の行儀を定む。留は別の枝にて蕾計りを遣ふ。尤も鉢の後へ女格を取る。口傳程よき所へづはいを使ふ可し。花器は置花器薄端等よろし。



◎臥龍梅は江戸本庄龜井戸村にあり。此出生は大木となりて數多の枝は土の方に進む勢あり。既にその枝土に付けば根を下し、大木となる。如斯漸々蔓りて龍の臥したる如し。故に水戸公臥龍梅と稱し給ひしなり。此姿を插花に愛する時は、廣口の向う角より、手前の隅へ振出して水をくゞりたる枝を挿る。其後へ立延びたる幹を遣ふ。此幹より出したる枝も土に進む勢に揉てよし。尤もづはいを遣ふ可し。留方砂留にて飾石有る可し

### 牡丹冬牡丹挿方の事

◎此挿方は用に勢強き葉を澤山遣ふ。獅子隠なり。夫より萬開の花を陽に挿れ。黒木二本長短に挿る。其下へ半開にて鉢の花を

挿る。この花に准じたる葉を花隠と稱ふ。留に苔を挿れ又切挿澤山遣ふ。是爪隠しなり。花器は薄廣口か薄端手附大籠の類宜し。又冬牡丹は花葉とも至つてやさしき物なり。幹付なれば挿方同様若葉は葉軸短くして難花なれば取扱口傳。有り葉の行儀備へ方右同様なり。

### 山吹玉川の景色挿方

◎此山吹は水の流れを愛する挿方なれば、先廣口へ黑白砂にて川の景色を移し、蛇籠二三にて山吹を留る。花の姿は縦鱗と横鱗にて二株或は三株五株と挿るなり。もご山吹は置花器にてはうつらぬ物なれ共蛇籠を使ふて挿したるぞ風情なれ。蛇籠



寸法は大は差し渡し三寸六分長さ九寸、小は差し渡し二寸四分長さ七寸二分、中二寸八分丈八寸右景色能飾り愛すべし。

藤、河骨、杜若、三種取合挿方

◎右三種取合せて挿る時は廣口の中へ黒白の砂にて水陸を分ち三才の石を飾り天の石は白砂の所に据へ、人地の石は黒砂の所に据える。白色は陸、黒色は水中なり。故に天の石の後より藤を挿る。下り枝は悪し。立蔓にて若芽を愛し、花は首出したる所が宜し。花房下り、葉澤山出したるは詠め悪し。尤も蔓は左旋右旋と卷きたるがよし。人石の後より杜若七葉二花横鱗に挿る。地の石より河骨を挿る。開葉一枚半開角葉に花を添へて葉

る可し。尙口傳。

杜若 一色挿方

參 洑池 鯉 鮒 浦  
蜘蛛手八ツ橋景色挿方

◎此景色は真中に大河あり。其左右へ蜘蛛手の如く四河宛有りて則ち八河なり。其八河へ橋を懸る。故に八ツ橋と稱ふ。僅の廣口に黒白の砂にて八河の景色を移し、杜若を挿る。尤も八ツ橋の挿方と云ふは、先廣口の真中へ縦一文字に黒砂を以つて大河を取り、向ふ手前も小河四河づゝ備へ定法の居處へ杜若の大株を挿る。前葉五葉組み、夫より花五輪葉は都合十五葉なり。此



株の後より廣口の半へ向け、蜘蛛の巣ごちの葉三枚水をくゞら  
せて出ず。其上に半開一輪追葉二枚是五葉一花の横鱗なり。續  
いて七葉二花の縦鱗五葉一花の縦鱗又七葉二花の横鱗都合  
五株向手前の河の景色よく挿れ、其間々へ若芽を挿る。川の取  
方花葉の遣ひ方口傳。

河骨一色雨中の景色挿方

◎此挿方は廣口にて定法の居處へ大株を挿る。葉の遣ひ方は鉢  
用に開葉鉢の添には半開用の添には小葉の開葉水より五六  
分離れて遣ふ。此葉水たゞきと稱ふ。花は鉢用の間へ一輪鉢留  
の間へ一輪留の角葉大小三葉遣ふべし。是七葉二花なり。三花

遣ふてもよし。九葉遣ふてもよし。魚道を分ちて、小葉の開葉半  
開角葉三葉に満開の花一輪添て水中へ挿る。又角葉の曲ある  
に苔を添へ水中へ挿る。都合三株なり。但し五株も挿るべし。水  
に浮き遣ひたる開花は陽中の陰なり。沈みたる苔は陰中の陽  
なり。浮沈の花葉を愛して雨中の景色とは稱ふなり。挿方口傳

蓮河骨杜若蘆水葵五種挿方

◎此挿方は大廣口に石五個を飾る三才の外に水漚石を陰陽ご  
遣ふ。天石の後より蓮を挿る。五葉二花より七葉三花を遣ふ。魚  
道を分けて大小浮葉を遣ふ。人石に杜若五葉一花の横鱗地の  
石に河骨を挿る水漚陽の石に蘆三本陰石に水葵か花澤瀉を



遣ふ蓮は主なる故に姿大きく外の花は姿少にして水際正しきを愛すべし。猶口傳あり。

### 一切實物の挿方

◎凡そ天地の間森羅萬像の姿に陰陽の備らぬはなし。然るに實物は其姿圓にして陰陽なりがたし。諸々の物圓くして姿に陰陽備らぬ物は用を達する事あたはず死物なり。故に實物を挿花に愛する時は陰陽の備へ方口傳。

### 左旋右旋之論

◎夫れ天は陽にて左旋し、地は陰にて右旋すと云ふとも、見ることを得ず。草木を以つて是を考ふるに、地中に陽氣を保つ時は

生ずる草木は左旋す。地中に陰氣を有る時は生ずる草木は右旋す。地中に陽氣を含む時は冬至なり。此陽氣地上へ發するは春分なり。地中に陰氣を含むは夏至なり。此陰氣地上へ發するは秋分なり。故に冬至より春分までの内宿根より生ずる草木は左旋す。春分より夏至までは暑寒に因らず陰陽和合の時候なれば宿根より生ずる草木左旋右旋當分に卷く。夏至より秋分までは宿根より生ずる草木は皆右旋す。秋分より冬至までは宿根より生ずる草木亦左旋右旋す。是陰陽和合の時候なればなり。又春分より秋分までに種を蒔きて生ずる物は、皆右旋す。秋分より春分迄に種を蒔きたるものは、皆左旋す。誠に草木は



天然寒暖の恵みに随したがひて更に私なし。是を愛する徳によりて  
廣大の理自ら明々然なり。

### 虚實之論

◎挿花の姿一鉢に虚實の備る故花を辨せず、手折りたる草木に  
三才鉢用の行儀を備へ、花葉をすかし、直きをまげ、曲れるを揉  
めて、根をよく締め挿上げたる處虚と雖も萬人の好む所なれ  
ば則實なり。萬物一切用を連る處裏にして皆虚なり。人間も脊  
は實にして表なり。腹は虚にして裏なり。然れども裏にて用を  
調ふる故に是を面と云ふ。是虚實なり。又枝の遣ひ方も出生の  
儘の直なる枝にては實なる故に詠めうすし。文かぎたる虚を備へ

曲を持たしむる所諸人進むが故に則實なり。虚實當分文質彬ひん  
々たる處是萬物一切の法なり。虚は則ち法の實ならんか人間  
は虚を面とし實を中に含むものなり。畜類は實を面に飾り、虚  
を中に含むめり則ち是を虚實と云ふ。用を連る所實なり。表な  
り。人間の用を調ふ處は虚なり。裏なり。右能々勘考ある可し

### 華術心得草木人畜出生之論

◎夫華を挿るには能く草木出生の辨へ有るべし。諸木諸草さま  
さまの姿様々の葉組花種々有りといふごも、其元は火水土三  
氣のなす所なり。地中より天中へ生ずる時は陰陽と掌を合せ  
たる如く出る。是陽の姿なり。然るに天は陽なる故に和合にあ



らず。和合せざれば成長する事あたはず。この葉開けば地の如くにて陰なり。則ち天地合躰陰陽和合し、漸々成長の上花咲き實を結ぶと言へども、聲も發せず動き働きもせず、況や是死物也。手折切つて挿花に愛する時は、靈妙を備へ、活物として取扱ふなり。或人曰く元より草木は死物にあらず既に地中より生じ四季寒暖に隨ひ其性正しく春は陽氣につれて野山に錦を飾りたる如く、花をもち枝葉にも濕ひあり。秋に至れば陰氣に隨ひ落葉あり是活物あらずや朽ちたる木枯れたる枝是死物なり。予云ふ。然り朽ちたる枝は死物なり。性ある草木は陽氣につれて悉く芽ぐみ、陰氣に隨ひて衰ふる景色あれども活物に

あらず、人畜魚鳥虫に至る迄性は心なり。夫に靈妙有つて善惡を辨。動き働きをなす。此活物にまごろむと云ふ事あり。まごろめば則ち心、性となりて煩惱を去り死物にひこし呼息は陽なり。吸息は陰なり。兩氣往來あつて其躰を養ひ人躰勞るれば夢を結ぶ。都へて草木は此寢たるに似て善惡の辨へなく、苔開かば陰陽の息の通に等し。故に手折りても其躰こたへなきは活物の夢を見たるが如し。既に其性は外に止りて皮肉を通ふ性あれども情なし。此理を辨へ當流にては死物と取扱ひ又草木人畜魚鳥虫に至る迄養ひ有るが故に成長するなり。人間は頭に養ひして堅に成長す。禽獸虫魚は頭に養ひして横に成長す



草木は頭に養を受けて逆に生育するものと知るべし。既に葉裏に陽氣の備りたる是自然にして和合なり。猶又草木に節枝備り中のすくこそ善惡の匂ひ有るこそ其他様々の出生活物に鉢卵濕化の四生一段二段三段の出生に至る迄其悉しきは匂ひの一卷を開きて是知るべきなり。蓋し此卷の花形鉢用なり。是鉢用變するの後其心を丹田に納めて案べし鉢は天地の間萬物一鉢の鉢にして不動用の働きは四時に移り更り千變萬化して後其一に歸す。則ち一鉢の鉢なり。此鉢の未生以前を知りて草木を愛す。當流插花の道は輕々敷慰みにあらず。風流の花を挿してしかも萬法の根本を知らしめんが爲なり。され

ば其蘊<sup>ふん</sup>奥<sup>おく</sup>を極めずして當家插花の意味深長夢にだも豈知る事を得んや。



此一卷於當家雖  
 爲秘玉書依熱心  
 今般令相傳者也  
 華道眞養未生流家元

不許  
 複製

大正十年六月二十八日印刷  
 大正十年七月一日發行

非賣品

大阪府堺市柳之町  
 眞養未生流家元 林昌寺  
 代表者 住職 森 田 靈 戒

印刷所

大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地  
 濱 田 印 刷 所

電話號碼 三三三九一〇番

11  
 468



終